26P-pm175

教員の介入による老健活動における薬学生の学びの違い

○永井　紀美[1], 岸本　桂子[1], 福島　紀子[1]([1]慶応大薬)

【目的】2006 年より慶応義塾大学薬学部では、多職種の理解、高齢者に関連する薬学的問題解決能力や服薬後の経過観察能力、コミュニケーション能力の養成等を目的とし、薬学部附属薬局が入所者の服用薬を調剤する近隣の老健施設にて薬学生の体験活動を実施している。自由参加による本学学部生と、附属薬局の実習生による老健施設での学びを比較した。

【方法】施設活動の時間は平日の朝食又は夕食時の 1 時間半とし、教員同行のもと食堂で活動を行った。実習生に対しては SBO に基づいた介入を行い、一方、学部生に対しては学生自身による気づきの援助に重点を置いた。2007 年 3 月～2008 年 6 月に初めて参加した学部生(3,4 年)7 名と、薬局実習の一環として参加した他大学実習生(3,4 年)8 名を対象に、活動の前と活動した後でアンケートを実施した。内容は高齢者に関連する「食事」「心理」「身体」「生活環境」「薬」「職種」「薬剤師」の 7 項目を設定し、自由記述形式とした。

【結果】記述内容は、活動前は高齢者に対する漫然とした類似した傾向の記述が多く、活動後の記述内容は具体的で多様性を示した。学部生と実習生ともに活動後に有意に記述文字数が増加した項目は、「食事」「生活環境」であり、学部生のみの項目は「心理」「薬」、実習生のみの項目は「職種」「薬剤師」であった。「身体」の項目は両者において、記載内容の多様化や文字数の有意な増加が見られなかった。

【考察】体験学習は学生自身の気づきによる学びが重要でありそれにはある程度まとまった体験が必要であるが、学生に対する介入方法やその度合いにより、短い活動時間であっても有用な学習効果があると言える。